熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	秋韻（小詩會詠草）：和歌：文苑
Author(s)	夕闇；野人；星陵；茫村；紫郎；聖花；蓮北；白月
Citation	龍南會雜誌，１０９：５０-５１
Issue date	1905-01-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5785
Right	

Kumamoto University

和歌

秋韻（小詩會詠草）

命あれのひゞきもあらず竹の葉のとびかふ空に見つる夕雲　夕闇

あや雲にたかきさとしやさぐり得しふとうなだれし夕べ野の友　野人

舞衣は紅葉ちらしの都染かへす袂の夕日にながき　星陵

こもり水に樫の實落つるひゞきして秋の山路たゞたそがるゝ　茫村

秋たけし夕べをいにし詩の靈か雨にほうけし野の名なし草　紫郎

草きらば歌もあるべし水くまば樂もあるべし秋いま高き　夕闇

芝笛に胸の思ひをひめてきてさみし廣野をわれ泣いてゆく　聖花

戀にやせて花のみむきて秋寒き石にものとふわれやこほろぎ　星陵

身と云はじ流轉しばしの夢うつゝ秋歡樂のうたにほこれや　紫郎

くれないの蔦にいみじきなさけ得てつめたき石の胸やさわがむ　蓮北

命ぞと仰ぐ光のふと消ねてあれ野の夕べたゞ秋の風　茫村

落葉ふみて音の高きにほゝゑむ子君がさだめもそれには非ずや　野人

沿ひゆくに人の名づけし名なとひそたゞ水清う紅葉ちる川　野人

落葉にもかたきさびしき命のせてうつや墓石秋の夕風　夕闇

力なき秋の夕日をつゝみつゝ胸をいだきて我戀に泣く　聖花

夕映の空にかゞやく紅葉のあかきは今ぞ君郷にゆく　白月

さび寒き野末の澤の水の精けふも音なく秋の日くれぬ　夕闇

いかならむ秋やこもると小萩原わけにし人のいづちまぎれし　茫村

かひまみし夕べうす月闇に入りてさびしみ空に秋の聲きく　聖花

すみ渡る空よりたろす秋の聲に古きみ堂の壁うたに鳴る　夕闇

佐保姫の身にあやどりの衣つけ舞ふに似てけり秋の夕ばね　蓮北

月うすき小萩が原の秋風は我世ふりにしうたにやはあらぬ　茫村

森の泉黄金銀杏の落葉して秋の女神の御鏡さびぬ　星陵

野のあぐみはじめて秋のさびをしりぬたゐなば息よ今宵このきは　野人

息ちさき小鳥の柔毛胸にあてゝあたゝめてやる秋の宵闇　夕闇

夜の靈の今か谷間をたちいづる谷間ことごとなりよどましむ　野人

秋たつと霧にこもりし沼の靈水にいささか波をあたへぬ　夕闇